

## 2020年漁期のスジエビ不漁とその原因について

大前信輔・太田滋規

### 1. 目的

2020年漁期（20年秋～21年春）のスジエビ漁況はこれまでに経験がないほど獲れないとの声が漁業者から寄せられた。このため、不漁の実態把握とその原因について検討を行った。

### 2. 方法

2020年漁期（以下、20年漁期）の不漁の実態を把握するため、沖曳は20年9月から21年3月の沖曳CPUE、エリは21年4月から6月の北湖に位置するエリCPUEを調べた。なお、沖曳、エリともにCPUEは複数の操業実績から求めた。北湖沖合におけるスジエビの分布については水産試験場によるソリネット調査結果を用いた。

### 3. 結果

20年漁期の沖曳の漁期CPUEは5.3kg/網であり、過去8年で最低値であった。また、漁期中にCPUEが最高となる2～3月のCPUEは20年漁期では6.5kg/網と過去8年で最低値であった（図1）。一方、エリの漁期CPUEは4.4kg/日であり、過去8年の変動の範囲内であった（図2）。以上から、20年漁期は沖曳、特に、2～3月の沖曳が著しく不漁であったと考えられた。

スジエビは貧酸素が解消した2～3月には20年漁期、2021年漁期（21年秋～22年春）ともに80m以深水域に集中して分布した（図3）。しかし、20年漁期は2021年漁期に比べ80m以深水域の生息密度に対する80m以浅水域の生息密度の比率が高かった。このことはスジエビが広い範囲に分散していたことを示すものと思われる。スジエビは貧酸素水域外に分布することが明らかになっており<sup>1)</sup>、21年1月まで継続した80m以深水域での貧酸素

<sup>1)</sup>がスジエビの分布に影響した可能性が考えられた。

また、2～3月の沖曳の操業水深を調べたところ、貧酸素解消前と同様に水深約70m水域で引き続き操業している事例も見られた。

エリCPUEの結果から、スジエビは21年春時点で例年に比べ少なかったと思われる。加えて、スジエビの分散による生息密度の低下が例年操業の行われる80m以深水域での漁獲効率の低下を招いたこと、操業場所とスジエビ生息場所のミスマッチが起こったことがスジエビ不漁の原因と考えられた。

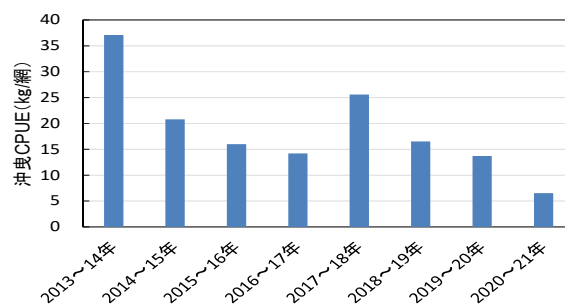


図1 2～3月沖曳CPUEの推移

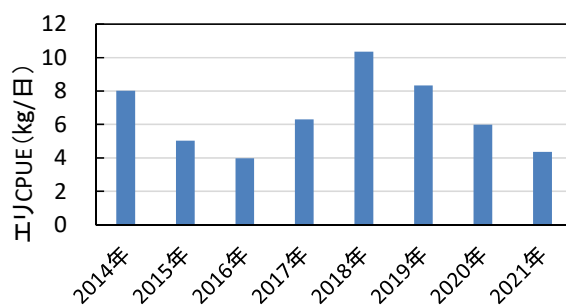


図2 4～6月エリCPUEの推移

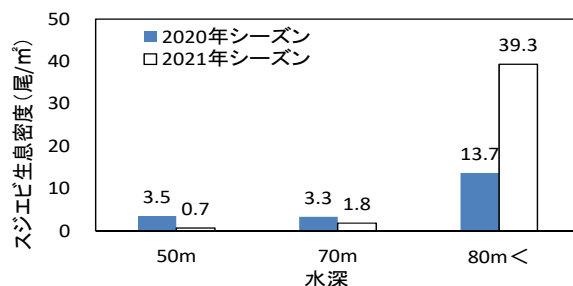


図3 2020年、2021年シーズンにおける北湖第一湖盆での2～3月スジエビ生息密度

文献 1) 大前他 (2022) : 北湖第一湖盆湖底の貧酸素化とイサザ・スジエビの分布. 令和2年度滋賀水産試験場事業報告